



FUTABA JOURNAL

静岡市葵区追手町10-71
静岡雙葉学園
新聞部
電話(054)255-0305
印刷所 ササキデザイン社

クリスマスを楽しむ

一般の方をお迎えしたクリスマス会では初めてクリスマスマーケットが行われた。また、クリスマス会では例年と同様に講堂に全校生徒が集い、キャンドルサービスとミサが行われ、午後からは部活動の発表が行われた。



▲ クリスマスの装飾を行う中二生

・クリスマス会
十二月二十一日(水)の午前は、クリスマスミサとキャンドルサービスが行われた。キャンドルサービスで
は暗闇の中、壇上の大きなキャンドルに明かりが灯り、順々に一人ひとりの手元のキャンドルへと広がった。キャンドルの光は救い主であるイエス・キリストを表している。

ミサでは、神父様があらたな一冊の本を紹介し、神は人となつて私たちと共に生きてくださる」と話された。午後からのクリスマス会では、吹奏楽部、聖歌隊、高3音楽選択者、コーラス部、ハープ部、創作ダンス部、演劇部の順に発表が行われた。
吹奏楽部は、Beat numberの「クリスマスソング」や MEGREENの「APPLE」の「ダンスホー

新プロジェクト発足!
新聞部は、昨年三月に発足したPEACEプロジェクトの創設者の一人である村松真子さんにインタビューをした。
Q1 PEACEプロジェクトを立ち上げたきっかけは。
A1 ロシアによるウクライナ侵攻がきっかけです。始めは、物資の支援をしようと考えていましたが、日本とウクライナでは季節が違うなどの理由で断念しました。
Q2 どのような活動をしているのか。
A2 ロシアによるウ

クライナ侵攻から一年経ちました。また、クラウドファンディングで募った支援金などを利用して、写真展を行いました。また、写真家川口敏彦氏を迎え、お話を伺いました。
Q3 今後PEACEプロジェクトをどのような活動にしていきたいか。
A3 報道のみでは伝わらないその国や地域に住む人についてや、その国や地域の共感をみなさんに広げていけるような活動にしていきたいと思っています。



▲ 創設者である(左から)平野凜々子さん、村松真子さん、西田里光さん

Q4 雙葉生に一言。
A4 自主的に参加する活動なので、興味がある時にぜひ参加してみてください。自分自身の視野や価値観を広げることがになります。

二年ぶりのマラソン大会
十二月十七日、マラソン大会が二年ぶりに行われた。天候が心配されていたが、雨は降らず無事に開催された。コロナ禍による制限のため三学年とも初のマラソン大会となった。参加者全員が初参加となった今回のマラソン大会。練習の時間には、十分間走や、コース練習などが行われた。朝練習や体育の授業での練習の成果を存分に生かし、それぞれが自身の力を出し切った。大会の本番前には、緊張している生徒の姿や、ストレッチをし

体をはくしている姿が見られた。また、スタート直前には他学年の先輩、後輩からエールをかけられていた姿も多く見られた。そしてゴール後は、会場は無事に走り切ることでできた感動や喜ぶ生徒達の声で溢れた。最後まで走り終えた生徒達は互いに声を掛け合ったり、達成感を分かち合ったりした。会場が感動で包まれた。マラソン大会は幕を閉じた。
▲ 走り切った雙葉生

十一月二十九日、本校講堂にて芸術鑑賞教室が行われた。演奏者としてLEOさんとピアノのロイさんとピアノのロイさんによる演奏であった。曲ごとに表情を変える音や美しいハーモニーに、生徒達は聞き入っていた。また、エフェクターという機械を使った音の音色はとて新鮮なものであった。
新聞部は、講演後にインタビューを行った。
Q1 どんな気持ちで演奏したか。
A1 皆さんの反応が想像以上に、エネルギーをもらうことができました。
Q2 エフェクターを



▲ 演奏の様子

新しい音楽の世界を知る

使い始めたきっかけは。
A2 一つ目は、津軽三味線奏者の上妻宏光さんです。テレビでエフェクターを使われているところを見て、「こういう表現も良いのか」と気付きました。二つ目は、ギター奏者のRyogenさんです。実際に使いたったきっかけはこの方です。
Q3 雙葉生へのメッセージ。
A3 LEOさん、今が一番楽しい時期です。失敗を恐れずに、部

活や勉強を頑張ってください。
ロイさん 失敗したという事は何かを試したということだと思います。オリーブンな状態で色々なことに取り組めばいいと思います。
私はおばあさんから昔の雙葉について教えてもらった。制服や校則、行事など、今とは比べてみると違いが多かった。改札に着くまでの短い時間だったが、とても楽しい時間であった。▼家族や友達などとはまた違う、温かい縁というのは確かにある。二度と会えないかもしれないけれども確かな繋がりが存在するのだ。忙しい日常の中でも心にゆとりを持ち、何気ない日々の中にあるふとした出会いが心を温めてくれることを忘れずに、一日過ごしていきたい。
一面担当・真唯
二面担当・穂香

ルなどを演奏した。聖歌隊は、ハンドベルを使った演奏や合唱など全四曲発表した。高3音楽選択者は、オペラ座の怪人の劇中歌や、日本歌曲を歌った。コーラス部は、事前に録音した音源を流し、森七菜の「スマイル」に合わせダンスを行った。ハープ部は、「もろびとこぞりて」などが入ったクリスマスメドレーを演奏した。ダンス部は、SEVENTEENS「Fear」や、IVES「After LIKE」など全九曲を踊った。演劇部は、部員自身が作成した台本で大学生である主人公のラブストーリーを上演した。そして最後に、先生方による劇が行われた。
生徒たちは、各活動の発表を熱心に見ていた。

・外部の方を招いたクリスマス会
十二月十七日(土)に一般の方をお迎えしてクリスマス会が行われた。講堂での理事長先生の挨拶では、「クリスマスは、家族や友人等と人との繋がりを確かめ合う大切な時です。プレゼントを貰う喜びだけではなく、お互いの幸せのために自分の大切な何かをけずって人の為になることを行う。これがクリスマスです。」と話された。
キャンドルサービスでは、コーラス部の歌声と共に会場は温かい光に包まれた。また、吹奏楽部やハープ部もクリスマスソングを演奏し、お客様を楽しませていた。終了後には、プロジェクト

ンマッピングも行われ、校舎にサンタが現れた。多くのお客様にご来校していただきコロナウイルス流行前のような賑わいを見せていた。
・クリスマス訪問
十二月十五日(木)、クリスマス訪問では、部活動ごとに施設を訪問したり、ビデオでメッセージやダンスを録画したりした。どの部活動もそれぞれ施設の方々へのプレゼントを考え、自分達で企画、運営を行った。また訪問に持って行くクリスマスカードは生徒たちが心を込めて作成した。コロナ禍で直接訪問できない、雙葉生と施設の方々との交流が深まった活動となった。

▼また制服が冬服に変わる前のことである。九月後半くらいで、秋に近づいているためか少し肌寒かった。帰って何をしようか考えていた時、後ろから声を掛けられた。「あなた、普段どうやって学校に通っているの?」▼声を掛けてきたのは一人のおばあさん。特に怪しい雰囲気も無く優しい人だという印象だったのだが、見知らぬ方からの突然の声かけにどう答えるべきか迷ってしまった。そんな私の様子に伝わったのか、おばあさんは「私、実は昔雙葉に通っていたのよ」と付け加えた。制服のポケットにつけられた校章で私が雙葉生だと分かり、声を掛けられたのだという。知らない人に声を掛けられたことへの緊張が少し解れた。私はおばあさんから昔の雙葉について教えてもらった。制服や校則、行事など、今とは比べてみると違いが多かった。改札に着くまでの短い時間だったが、とても楽しい時間であった。▼家族や友達などとはまた違う、温かい縁というのは確かにある。二度と会えないかもしれないけれども確かな繋がりが存在するのだ。忙しい日常の中でも心にゆとりを持ち、何気ない日々の中にあるふとした出会いが心を温めてくれることを忘れずに、一日過ごしていきたい。



